

国際結婚家庭の子どもを対象とする舞踊教育：日韓国際結婚家庭の子どもの文化的アイデンティティに注目して

お茶の水女子大学大学院 崔 有夏

1. 研究背景と目的

現代社会では、多様な文化的背景を持つ子ども達が共に暮らしている。その中で、国籍が異なる両親のもとで育つ国際結婚家庭の子どもの場合、二つの母国に所属意識を持ち両文化を自分のものとして受け入れた「融合された文化的アイデンティティ」の形成が可能であり、このアイデンティティの状態が、彼らにとっては健康で望ましいとされている(マーフィ重松 2002 他)。ゆえに、それらの育成を目指す教育を実施する際は、居住国の文化的アイデンティティの形成に焦点を置いたものだけでなく、複数のルーツを持つ子どもの文化的アイデンティティの特性を踏まえた教育も提供していく必要があると考える。

舞踊教育は、融合された文化的アイデンティティの形成条件となる「二文化・二言語の習得」と「国際結婚家庭の子どもを肯定的に捉える環境の存在」つまり「他者との友好的関係づくりと交流」(マーフィ重松 2002; 鈴木 2004 他)を達成させるのに適する分野だと考えられる。すなわち、舞踊を通して母文化を理解・受容し、他者と相互作用した上で文化的アイデンティティを形成するよう促すことが可能だと想定される。以上のことから本研究は、日本と韓国につながりを持つ子どもを対象に舞踊教育プログラムを実施し、それらの教育経験が彼らの文化的アイデンティティの形成に与える影響を明らかにする。また上記の実践事例を通して、文化的アイデンティティ形成に資する教育としての舞踊教育の有効性を提示することを目的とする。

2. 研究方法

文献調査、インタビュー調査(予備調査、2019年11月-2020年2月)で検討した研究対象者(A-K、11名)の文化的アイデンティティの特性及び舞踊経験の現状と、日韓の学習指導要領を参照した上で舞踊教育プログラム案を作成し、その後、日韓国際結婚家庭の児童・青少年5名(E、G、I、K、L)にワークショップを実施した(2020年8-9月、全4回)。そこでは非居住母国である韓国の民俗舞踊(タルチュム)と各自の表現の探求を行った。またワークショップの参与観察と映像・音声データの収集、事後質問紙及びインタビュー調査を実施し、これらの結果について質的分析と考察を行った。

3. 結果と考察

子ども達のワークショップ参加時の様子と事後調査において、その影響の度合いを知るための調査の視点は、先行研究(鈴木 2004; 竹内 2016 他)と予備調査をもとに筆者が設定した。すなわち、

本研究の調査項目は、融合された文化的アイデンティティの形成要素となる a)母文化知識の習得(基本前提)、b)自己表現の経験、c)非居住母国の文化知識を用いての他者との交流、d)家族(特に外国籍の親)との円満な関係、e)同じルーツを持つ人との交流、f)自分のルーツの理解と探索の経験、g)非居住母国への関心や興味(愛着心)である。

調査の結果、まず参加者全員がワークショップへの参加を通して a)母文化知識の習得ができたことと答えた。特に「腕を強く振るのが韓国的な雰囲気(E)」、「みんなで集まってやるのが好きな民族性(K)」などの言葉から、踊りに含まれる情緒や姿勢、特徴的な動き方を発見していたことが観察された。民俗舞踊は、慣習と風習及び身体文化、身体技法を根底にする踊りである(原田 2012)ことから、これらの学びは、母文化の理論的知識の習得だけでなく、母国の民族性と身体的文化を自分のからだを通して体得することにつながったと考えられる。

実際に友達に母国の踊りを紹介した(E)、又はそうしたい(G、K、L)という回答からは、今回の舞踊経験は c)非居住母国の文化知識を用いての他者との交流の可能性を高めたと考えられる。また家族と母国の踊りに関して共有した(E、G、L)という回答から、d)家族との円満な関係に寄与したと推察される。さらに民俗舞踊を応用し仲間前で自分なりに自己と他者のイメージを表現する活動を通して、b)自己表現の経験ができたと考えられる。e)同じルーツを持つ人との交流については、同一の文化的環境を持つ仲間とチームになって一緒に母国の踊りを踊る活動の様子の観察結果から、ワークショップは、自他理解の機会と同じ家庭環境を持つ人との交流の場を提供できたと言える。

次に、f)自分のルーツの理解と探索の経験と関連し、参加者E、G、I、Lが、参加中や参加後に自分と韓国との関りを感じたと回答した。g)非居住母国に対する関心や興味(愛着心)については、参加者E、G、K、Lが、参加後に韓国への関心・興味が高まり、他の韓国の踊りも学んでみたいと答えた。また参加者全員は、参加中や参加後に日韓国際結婚家庭の子どもであることに自信や誇りを感じたことが回答から確認できた。この結果は、韓国文化を題材にした活動の中で、韓国人としてのアイデンティティを十分に認識しながらより主体的かつ積極的に取り組んだためだと推察される。

4. まとめ

本調査の結果から、民俗舞踊を用いた文化的アイデンティティ教育の方法とその可能性を提示できた。これらの経験は、母文化を理解し自分のルーツを認識した上で自身と向き合うきっかけになることが示唆された。舞踊教育は、国際結婚家庭の子どもとしてのアイデンティティを促し、それらの肯定的な形成に寄与できると考えられよう。

【主要参考文献】
S・マーフィ重松、桜井純子訳(2002)『アメリカンの子供たち—知られざるマイノリティ問題』集英社新書
原田奈名子(2012)「ボディワークと、身体技法とソマティックの語義」『京都女子大学発達教育学部紀要』8: 21-31